
日常アウト

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常アウト

【Zコード】

Z2188BA

【作者名】

レオ

【あらすじ】

・・・・最近、日常がくだらない。

高校1年生の静は自分の平凡で

日常的すぎる毎日に嫌気がさしていた。

そんな時、屋上で一人の男子と出会い・・・?

* 第1話 *

・・・ 最近、 日常がくだらない。

あたしは桜ヶ丘学園、1年A組の谷川静。たにがわせい

最近、かなり日常がくだらない。

今は3月上旬。もうすぐ高校1年生の日常が終わる。だからこそ、日常がくだらない。

いつもの学園、いつもの教室。

いつもの机にいつもの椅子。

いつものクラスメイトにいつもの教師。

いつもの授業にいつもの生活。

いつもの家族にいつもの――

ついでに言うと、理屈をネチネチと立てて話す人間が大嫌いだ。うつとうしい。

別に無理やり筋なんて通さなくていいと思つんだよね。ぱっともの「」と言って、間違つてると思えば訂正すれば良い話。そんな単純な事を知らない人間にあたしはかかわりを絶対に持たない。むしろ持ちたくないわけで――

高校1年生の一年、なにからなにまでいつも一緒に最近・・・というよりか、9円「」から

日常が日常すぎてくだらぬすぎる。

なにか、変わったことはないのだろうか。

世に言つ、非常つてやつをあたしは求めてるのだろつね。

今は昼休み。

久しぶりに、屋上に行つてみよつかな。

なにがあるかも。いやまあ、ないのが9割。
でも後の1割ってのは重要なんだよ、意外と。
ま・・・ぐだらない可能性だけね。

屋上に出ると、まだ冬に近い春だから肌寒い。
ひざ掛けでも持つてこればよかつたかな。

いやまた、こんなところに持つてきても吹き飛ばされるよね。
そんな事を思つていると、不意に屋上の端のほうから男女の声が聞
こえた。

「俺は一人の女の子と付き合つなんてことできないんだよね
」「で、でも・・・！」

「ごめんね、君もずっと俺のファンでいて？ね？」

「あつ・・・！は、はい！」

「それじゃ、また下校時に」

あたしはさつと屋上にある物置小屋の裏手に隠れた。
誰かに告白していたであろう女の子は
顔の筋肉を緩めて、口角がかなり上がっている状態で
屋上を出て行つた。

会話からすると、告白した相手がかなりのモテ男で
ファンクラブまであって、で、振られて
それでもファンでいてねと言われながら
はぐかなにかをされて、ああなつたとね。
はあ・・・ぐだらない告白を聞いてしまつた。
まあ・・・いいか。

昼食とうつと・・・

あたしは屋上の裏手から平然と出てきて
屋上の手すりの近くにあるベンチに座つて
朝、コンビニで買ったパンをあけた。
さつき告白をされていた男子は気づいてるのか

気づいてないのかしらないけど

こっちにはよつてくる気配はなかつた・・・はずだつたけど
いつのまにか、後ろに気配を感じて振り向くと
イケメンつてのがぴつたりはまる、そんな男子が立つていた。
きつと、いや絶対さつき告白された男子だろう。

「君、さつきの会話聞いてた?」

「聞いてましたよ」

「へえ・・・嫉妬とか、ないの?」

「嫉妬つて意味がさっぱりわかりませんが」

「この学園1モテる俺がほかの女の子にはぐをしたんだよ?」

「へえ。で?」

「え?いや、でって・・・」

「あたしあなたの事知らないんですけど」「はあ?!

急に大声を出されてびっくりした。

「そんなに驚く事なんですか・・・?」

「い、いや・・・俺の事知らない人なんて始めてみた・・・」

「すいませんね。」

「まあいいよ。」

「あの。一つ言つていいでですか」

「ん?何?」

あたしは思つてた事を全部言つた。

「女の子にあんた思わせぶりな振り方したら

ずっと付いてきますよ。というよりか、その女の子がかわいそうですよ。」

「どうして?」

「話聞いてる限りだといままでこいつこいつ振り方をしてきたんでし

ょうね。」

「まあね」

「じゃあ、本当に好きな人ができたとき、どうしますか?」

「まあね」

「そりや、普通に会話をして、おもひつけば？」

「じゃあ、あの振ったファンの子達せ、どうなりますか」「俺が誰と付き合おうとして、きっと俺の事を愛してくれると」

「…………」

「こつ……話にならない……

「もういいです。話になりません。」

「最後まで話してよ」

「いやです。失礼します」

「ねえ」

「なんですか……」

早く立ち去りたい。

どれだけ非日常にあこがれたいからといって
こんなやつと話してるのはいやだ。

・・・理屈をネチネチ立てるやつよつましだなび・・・

「明日もこい、きてよ」

「いやですよ」

「ここから、来て。」

「いやです」

「なんですか？」

「・・・あたしは非日常を求めてるんです。あなたなんかに付き合つてる暇、ないですから。」

「ふーん・・・じゃあ、俺が非日常を紹介してあげようか?」

「へ・・・?」

その人の思わず言葉にあたしは振り返った。

その人はベンチに座つて足を組んで
ニコニコと笑っていた。

「明日来てね?」

「・・・はい・・・」

「ア、名前は?」

「谷川静です」

「俺は小倉透真」

「・・・明日も失礼します・・・」

そういうてあたしは非日常といつ言葉につられて
明日もここに来る約束をしてしまったのだった。

* 第2話 *

次の日。

いつものように強い光がカーテンから差す。
あたしはいつも通りカーテンを開けて
いつものように朝食を食べて
いつものように制服に着替えて
いつもの時間に家をでて
いつものように登校する。

行きしなにはいつもパンベイードのパンを買いつ。

今日もいつもと同じ、ぐだらない日常・・・だけど
毎にはいつもと違う事がある。

昨日、屋上で小倉という人に言われたこと。

『俺が非日常を紹介してあげようか?』
この言葉に反応して承諾したけど
本当に非日常があるのか、わからない。
なにかの餌だつたりしてね。

やっぱり今日、行かないで置こうかな。
いや・・・でもいかないと、今までたつても変わらないような気が
がする。

・・・やはりこうか・・・かな。

いつものように教室に入って、いつものように挨拶を交わす。

「あ、静おはー」

「おはよ」

「静ちやんおはよー」

「おはよー」「ひよー」

いつもの席に座る。わい。今日またひよー。

授業さぼるか、それとも受けるか。

これがあたしの日常の中では唯一選べるといふが。
1時限目は出て、2時限目から出るかでないかなんとなくで決める。

これだけがいつも違う。そしてサボるとこには屋上。
昨日屋上は久しぶりって言つたけど

昼休みに行く屋上は久しぶりって意味で

実のところは屋上は2日に1回行つてゐるわけで。

「静今日サボる?」

「え?あー・・・うん。今日の授業だるそだだから」

「そつかそつか。俺と一緒にだな!お前も俺のなかまだ!」

「お前の仲間なんぞになりたくないこよ。」

「ぐさつ俺ぐさつ來たぞ!」

「しりないわよ。あ、入り口で愛しの彼女がもじもじと
待つてるよ?浮氣だと思われてもあたしは知らないからね

「なつ!萌美~ごめん~」

いつもと同じ、くだらない会話。

朝のH.Rもたんたんと終わり

1時間目の授業も気が付けば終わっていた。

あたしはアイポッドとPSPをもつて屋上に行く。
これもいつもの曲にいつものゲーム。

あ、一応ひざ掛け。

屋上に出ると、やはり肌寒い。

風はそんなに吹いていなかつた。

ベンチに座り、ひざ掛けをかけて、イヤホンを耳につけて
アイポッドをつけて、曲を鳴らして、ゲームをつけて

ゲームを始める。いつもと同じだ。

10分ぐらいして不意に肩をたたかれて
ゲームを一旦とめて音楽をとめて後ろを向くと
そこには、昨日屋上で出会った
| 小倉透真が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2188ba/>

日常アウト

2012年1月5日22時50分発行